

Title	『マンデヴィルの旅』と近代旅行記の起源
Sub Title	Mandeville's travels and the origin of modern travel writing
Author	松田, 隆美(Matsuda, Takami)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2004
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.86, (2004. 6) ,p.126(249)- 136(239)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2003年度藝文学会シンポジウム 「Wish you were here! : ヨーロッパ文学と旅」
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00860001-0136">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00860001-0136</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 2003年度藝文学会シンポジウム

## 「Wish you were here! —— ヨーロッパ文学と旅」

### 『マンデヴィルの旅』と近代旅行記の起源

松田 隆美

1357年頃に制作された『マンデヴィルの旅』(*Mandeville's Travels*)は、14世紀から16世紀にかけて汎ヨーロッパ的なベストセラーのひとつで、その記述はコロンブスにも影響を与えたとされる。作者については本書の冒頭で以下のように記されている。

私 [ジョン・マンデヴィル] はイングランドのセント・オールバンズの町に生まれ、西暦1322年の聖ミカエル祭の日(9月29日)に航海に出て以来、今日まで長い間海上にあって、多くの珍しい国々、多くの地方や王国や島々を見たり、通ったりした。トルコ、大・小アルメニアを通り、タタール、ベルシア、シリア、アラビア、上・下エジプトを抜け、リビア、カルデア、エチオピアの大部分を通り、アマゾニア、大・小インドの大部分とインドをとりまく多くの島々に行った。私はこの本をラテン語からフランス語に翻訳し、さらに、わが国の人々皆に理解してもらおうと、フランス語から英語に翻訳した次第である。(プロローグ、pp.5-6)<sup>①</sup>

しかし後世の研究で、ジョン・マンデヴィルは偽名であり、作者は恐らくは今日のベルギーのリエージュに住んでいたフランス人の聖職者で、もともとフランス語で書かれたテキストが様々な言語に訳されて急速にヨーロッパ中に広まったことがわかっている。それどころか、本書は、フラン

シスコ会士ポルデノーネのオドリコ (Oderic de Pordenone) の『東方地誌』 (*Descriptio Orientalium partium*, c.1330) やヴァンサン・ド・ボーヴェ (Vincent de Beauvais) の『歴史の鏡』 (*Speculum historiale*) のような、13-14世紀のラテン語の旅行記や百科事典を典拠として編纂されたもので、作者は、こうした書物を利用するために図書室には足蹴しく通ったにせよ、恐らく実際に旅には出なかつただろうと考えられている。しかしこうした事情が徐々に明らかになるのは16世紀末で、それまではジョン・マンデヴィルという歴史上のイギリス人による真正な旅行記としての読みが基本的に受け入れられてきた。部分的にせよ本書をノン・フィクションとみなす主張はその後根強く、1996年にもイギリス人のジャーナリストがマンデヴィルの足跡を実際にたどったルポルタージュを発表している。<sup>20</sup>本発表では、『マンデヴィルの旅』のフィクションとしての性格はひとまずおいて、この旅行記を、近代以降のヨーロッパの旅行記の起源に位置づけてみることにする。

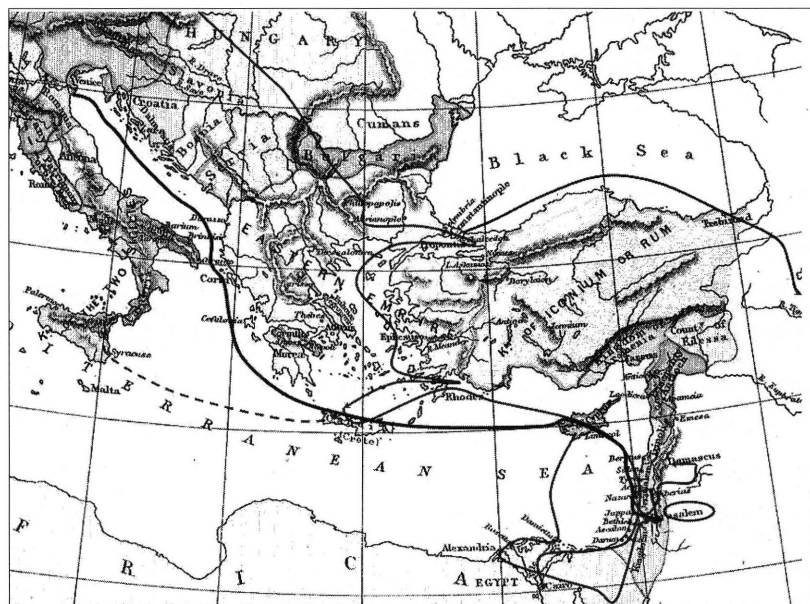
『マンデヴィルの旅』は、エルサレムを中心に聖地を巡り、その後インド、中国へと向かって伝説のキリスト教国プレスター・ジョンの国に到達し、アジアの果てに存在すると信じられた地上楽園へと続く道の手前まで行ってひき返してきたというものである。その意味でこの旅行記は、聖地への巡礼記とマルコ・ポーロのような東方旅行記とから形成されているが、巡礼記も東方旅行記も、マンデヴィル以前から中世において広く読まれたテキストであった。

少なくとも16世紀末までは、聖地エルサレムを訪問するには現地のフランシスコ会などが組織した巡礼団に加わるのが一般的であった。西ヨーロッパからの巡礼には幾つかの主要なルートが存在していて、14世紀後半には聖地巡礼は今日的なパッケージツアーになっていた。ヴェネチアから船でクレタ島、キプロス島を経由してヤッファに上陸し、陸路を真っ直ぐにエルサレムへ向かい、10日間ほどの聖地訪問のあと同じルートで帰路につくのが一般的であった。マンデヴィルはドイツから東ヨーロッパを横断してコンスタンティノープルに到着し、そこからは海路で聖地へと向って

いる。しかし地図から明らかなように、マンデヴィルは真っ直ぐにエルサレムに向かわずに、クレタ島とキプロス島に立寄ってテュロスの港に上陸すると、沿岸地域を通過してまずエジプトへと向かう。カイロに到着すると、叙述は一時的にヨーロッパに戻ってシチリアからキプロス経由でエジプトへ至るルートが紹介され、その後でシナイ山を訪れ、ベツレヘムを通過してエルサレムに到着している。つまりマンデヴィルの旅程は、巡礼の最終目的地であるエルサレムをわざと迂回し、その周りに円を描くように前進と後退を繰り返しつつ、周辺地域を経由してようやくエルサレムに到達するのである。旅の途上に登場する、クレタ島、キプロス島、シチリア、エジプトなどの諸地域は主に聖書考古学的な興味から論じられ、様々な遺跡や聖書ゆかりの土地が紹介されるとともに、直接聖書とは関係のない自然の驚異も多く語られている。たとえばピラミッドについては、「創世記」41節に登場する、ヨセフが7年間の飢饉に備えて、「海辺の砂ほどに多くに穀物を蓄えた」穀倉であると記述されている。(第7章, pp.45-46)

マンデヴィルの旅行記を巡礼記として見るならば、こうしたいわば寄りの道的記述はその本来の性格からかなり大きくはずれている。シトー派の開祖の聖ベルナルドゥスは、巡礼の途上で風光明媚なレマン湖畔を歩いたときに、俗世の誘惑を退けるためにあえて足元を見つめて歩いたと語り伝えられているが、巡礼とは本来このような内面化の旅であり、最終目的地への速やかな旅を妨げる様々な情景や観察は排除されるべきものである。<sup>9)</sup>寄り道をする無益な好奇心 (*curiositas*) は巡礼の理念とは相容れないものなのだが、『マンデヴィルの旅』ではこうした周縁的好奇心が顕著である。聖地そのものについての記述は極めて詳細で、たとえば13世紀のテオドリクスの聖地巡礼記のようなポピュラーな巡礼ガイドブックに引けをとらない。<sup>10)</sup>しかし、その寄り道の多さと複雑な旅程はマンデヴィル独自のもので、それは、巡礼の関心が、すでに贖罪よりも知的的好奇心へと徐々に移行しつつあったことを反映しているとも言える。

聖地訪問を終えたマンデヴィルは、再びコンスタンティノーブルから船出し、黒海を渡ってアジアへむかう。旅行記の後半は、インドの不老の泉、



『マンデヴィルの旅』の聖地へのルート

家ほどもあるスマトラの巨大なカタツムリ、樂園を追われたアダムとイブが泣きはらした涙でできた湖、アンダマン諸島の一つ目族、プレスター・ジョンの国の宝石の川など、中世的驚異に満ち溢れている。東へ向かうほどに驚異は増大してゆき、実質的な旅の終わりである東方の伝説上のキリスト教国、プレスター・ジョンの国の記述では、キリスト教的な秩序と宝石の川のような驚異とが混然一体となって登場している。しかし、こうした「驚異」への好奇心は、マルコ・ポーロの見聞録やマンデヴィルが活用したオドリコの東方旅行記などの基盤を成す特色で、その意味ではマンデヴィルはそれらを典拠として活用しているに過ぎない。『マンデヴィルの旅』のオリジナリティはむしろ、こうした驚異を扱うに際して地図学的な視点を導入した点にある。マンデヴィルが念頭に置いていた地図とは中世において数多く作成されたマッパムンディと呼ばれる世界図だが、これは、エルサレムを絶対的中心として、上にアジア、左下にヨーロッパ、右下にアフリカを配した円形の観念的な地図である。現存するもっとも詳細かつ

最大の例は、1300年頃にイギリスで制作されヘレフォードの大聖堂図書館に現存しているヘレフォード世界地図で、そこでは約1.5メートル四方の地図面に1100以上の地名が書き込まれている。<sup>6)</sup>地図の中心にはエルサレムがあり、そこで3つの大陸が交わっている。エルサレムの周囲を弧を描きつつ旅するマンデヴィルは、「今度はまた、こちら側に戻って話を続ける」という表現を用いているが、この場合の「こちら側」とはヨーロッパを指す。コンスタンティノープル、ダマスカス、カイロなどのキリスト教史とも関連が深い地名は、キリスト教文化と異教文化との境界線上に位置づけられている。マンデヴィルの旅とは、マップマンディ的な世界認識にもとづいてまさにこうした境界域をゆく旅に他ならない。

しかしマンデヴィルの地理感覚は単に観念的なものではない。「また、読者の皆さんは、私がエルサレムは世界の中心にあると言ったのをお聞きになったと思う。そのことは、昼と夜の長さが同じ日の正午に地面に一本の槍を突き刺すとどちらにも影ができないことから証明できるだろう。」(第21章, p.161)と述べて、地理的にもエルサレムが地球の中心であることを科学的に示そうとしている。また、「西の国々から出発してエルサレムに向かう者は、そこへ上って行くのと同じ日数で、エルサレムから正反対の地域へ行くことができる」、あるいは「スコットランドやイングランドからエルサレムに行くには、常に上に向かって進む」(第21章, pp.160-61)とも述べているが、上へ、下へという表現は、マップマンディを念頭においたもので、その旅はまさに地図の下の方から、頂点にあたる地上樂園にむかって移動する。この章では天体観測装置のアストロラーブを用いた緯度計算を持ち出して、イギリスとプレスター・ジョンの国とは丁度正反対の位置関係にあるが、地球は球体であるから、逆の方向へ進むことで地球上の同一点に到達できることを示している。

こうした認識は、異界的なものを含むさまざまな驚異を現実の地図上に配置することを可能とし、実際にそこを訪問する可能性について考察を促すこととなる。最終目的地の地上樂園はノアの洪水でも水没しなかった高地にあって周囲を壁に囲まれおり、その壁は苔と灌木ですっかり覆われて

いると記述されているが、マップマンディでは地図の頂点に描かれる。マンデヴィルによると、そこに到達するにはプレスター・ジョンの国の先の砂漠と晴黒の国を越えてゆかねばならないが、この西側から楽園へと至る道は今や完全に閉ざされている。

プレスター・ジョンが君臨する土地と島々と砂漠を越えてまっすぐ東へ進んでいくと、山と非常に大きな岩以外何も見当たらない。この国の人々の話によると、そこには昼も夜も何も見えない晴黒の国がある。その砂漠と晴黒の国はこちらの海岸から地上の楽園まで延びている。この楽園は我々の始祖アダムとエバが置かれてほんの暫くの間住んでいた所である。それは東の方、地球の始まる所にある。…ちなみに、死を免れえぬ人間はなにびとたりともあの楽園に近づくことはできない。砂漠には野獣がおり、高い山々や巨大な岩壁が行く手を阻み、至る所に暗黒地帯があるために、陸路で行くことはできない。また川を遡って行くこともできない。(第34章, pp.256-57)

地上楽園に関する記述はポルデノーネのオドリコなどにも認められるが、『マンデヴィルの旅』は、そうした文学伝統をふまえつつも、地上楽園の位置を地球的視野で具体的に示そうとしている。コロンブスも地上楽園については基本的に同じ考えを持っていて、「非常に近いところにある」と信じていたとされる。そしてマンデヴィルを読んだ結果、球体の地球を航海して東側からこの楽園の山に近づくルートを考えて。地上楽園のなかには神の加護がない限り入ることはできぬと認識しつつも、南米のオレノコ川の河口では楽園の近くまで来たと信じたのである。<sup>6)</sup>

こうした地学的な視点によって、異界はヨーロッパの現実の延長線上に確保された。『マンデヴィルの旅』は大航海時代にも様々な言語で印刷されて読み続けられて、16世紀末に刊行されたりチャード・ハクルートによる航海記の集大成*Principal Navigations*にも収録されている。その継続的な人気の理由は、中世以来の様々な幻想的驚異の存在自体にあるというよ

りも、むしろそれらが地学的視点で配置されていることにある。その視点は、コロンブスの場合のように現実の航海を誘発しなくとも、著述に新たなリアリティを加えることとなった。楽園が到達不可能であることは、かえってその手前のプレスター・ジョンの国を到達可能な異界として際立たせることとなり、16世紀には、プレスター・ジョンの国の場所を具体的に示した地図も作成されている。<sup>6</sup>実際の見聞情報が蓄積されるとともに、近代の旅は、地球上に伝説的驚異を探し求めるかわりに確認済みの驚異を地図をたよりに調査する、よりアカデミックで科学的な旅へと推移したが、そうしたシフトをそもそも誘発したのは『マンデヴィルの旅』だったと言える。

しかしマンデヴィルがここまでの信頼を得たのはなぜなのか。その理由のひとつは、淡々とした客観的な批判精神に裏付けられたような語り口にある。マンデヴィルはいたずらに記述の真実性を主張することをせず、「そう伝え聞いている」とか「私には確認できなかった」というような留保を効果的にはさむことで、かえって読者の信頼を勝ち得ている。この点は次のマルコ・ポーロの序文と比べると明らかである。

これは、ヴェネツィアの賢く高貴な市民マルコ・ポーロ殿が、実際に自分で目にしたことを語ったものである。もっとも、中には自分で目にしなかったことも含まれているが、その場合でもマルコ殿は確かな人物から真実として耳にしたのである。そこで私たちは、私たちのこの書物を嘘いつわりの混じらぬ正しい書物とするため、見たことは見たことと、また聞いたことは聞いたこととして記すことにしようと思う。だからこの書物に耳を傾ける方や、またみずからお読みになる方は、すべてが真実であるのだから、どうかこの書物のことを信じていただきたい。というのも、皆さまにお断りしておくが、主なる神が私たちの最初の祖先アダムをお造りになって以来、どのような時代にも、このマルコ・ポーロ殿ほどに世界のさまざまな地域とその大いなる驚異を知った人間はいなかったからである。<sup>8</sup>



こうしてマルコはひたすら真実性を主張するが、かえって根拠がないと  
いって嘘つきのそしりを受けた。一方でマンデヴィルは権威を持ち出して  
いる。

とりわけ、知っている人からの情報に基づいて、自分では見たことの  
ないものと、自分の目で見た不思議なものや習慣について神の恵みに  
より記した記録を教皇に見せて、彼の賢明にして思慮深い枢機卿会の  
判断による審査訂正のほどをこの聖父にお願いした。すると聖父は、  
特別の計らいにより、この書を件の枢機卿会によって審査証明するよ  
う委託された。その結果、枢機卿会によって私の本は真実と証明され、  
審査の基準に使われた書も見せてもらった。この書物には私の本より  
百倍も多く含まれており、世界地図もそれに基づいて作られたのだっ  
た。こうして私の本は、著者であろうと誰であろうと、いかに正直で  
も、多数の人は自らの目で見えるもの以外は何も信じたがらないもの  
が、上述した形で聖父によって確認され証明されたのである。(第35  
章, pp.266-67)

つまり、自分が旅で経験したことは逐一、たとえばヘレフォードのマッ  
パムンディのような詳細な地図が作られるもととなった、教皇庁図書館に  
保存されている権威ある書物と一致することが確認されているから、自分  
の体験の信憑性は明らかであると主張している。しかし、言うまでもなく、  
そのことがマンデヴィルが最初からその「権威ある書物」を用いて自分の  
旅行記を書いた可能性を否定することにはならないため、この主張は根本  
的に矛盾を孕んでいる。こうしたテキストの権威への依存は極めて中世的  
だが、その一方でこれは、16世紀のヒューマニスト達に受け継がれた姿勢  
でもあることは無視できない。イギリス人のヒューマニストのひとり、  
ジョージ・サンデイス (George Sandys) は、1610年に聖地、エジプト、ト  
ルコ、南イタリアを旅して、旅行記を刊行した。この旅行記は、その訪問  
地がマンデヴィルのそれとほぼ合致するという点でも興味深いものであ

る。エジプトではマンデヴィルと同様にピラミッドについて触れているが、マンデヴィルの聖書考古学的解釈とはことなり、ヒューマニストのサンディスは、紀元前1世紀のローマの詩人プロペルティウスの詩を引用して、ピラミッドは墓であるという、マンデヴィルが否定した説を採用している。<sup>99</sup> サンディスは、聖地をはじめ非ヨーロッパ圏の記述では、マンデヴィル同様に、実際の経験よりも図書館に頼って執筆した箇所が顕著である。重要な違いは、サンディスが依拠した権威はヒューマニストによって校訂され吟味された古典テキストであるという点だが、その一方で、実体験を保証するのはテキストの権威であるというマンデヴィルが持ち出した中世的な論理が、ヒューマニスト達のアカデミックな興味をも支えていると言える。ヒューマニスト達の旅は、古典作品からの引用を多用して現実というテキストに注釈をつける体験であった。マンデヴィルとは違った意味で、彼らにとっては、現実のエルサレムもテキスト上のエルサレムも等しくリアルであり、その真実性は甲乙つけがたいものだったのである。『マンデヴィルの旅』が近代に読み継がれていった背景には、こうしたヒューマニスト達の姿勢もあったことは無視できない。

『マンデヴィルの旅』が、いわゆる旅行記の正典から外されるのは、1613年から刊行されたサミュエル・パーチャスによるハクリュイットの再版においてである。しかし、マンデヴィルに溢れている驚異への積極的な好奇心は受け継がれてゆく。中世の巡礼記としては相応しくないさまざまな驚異の記述や無駄な知識こそが、ルネサンスの旅行記のもう一つの特色であった。サンディスの古典注解ツアーとほぼ同じ時期に、2人のイギリス人の旅行者、トマス・コーリヤット (Thomas Coryat; 1577-1617)<sup>100</sup>とファイネス・モリソン (Fynes Moryson; 1566-1630)<sup>101</sup>がそれぞれヨーロッパ一周の旅をした。2人が残した旅行記は初期のいわゆるグラント・ツアーの記録だが、彼らは、イタリア人が食事時にフォークという道具を使うと言って感心し、既にひとかどの観光スポットになっていたペトラルカの山荘ではペトラルカの飼い猫の皮を見せられて半信半疑となり、夜道を彩る蛍の群れが天の川のように美しいと言って感動し、さらにヴェネチアの高級遊

女（コルテジャーナ）を冷やかし半分に訪問して腐った卵を投げつけられた体験を嬉々として語っている。こうした体験は個人的かつ些細な事柄だが、旅の驚異であることには変わりはない。それは、ヒューマニスティックな古典への興味と混じり合い、17世紀以降のグランドツアーの旅行者達の極めて雑多で多様な好奇心を育み、彼らの珍品キャビネットの中身を充実させてゆく。旅における自由な魂の解放こそが、近代ヨーロッパがマンデヴィルから受け継いだものであったと言えるだろう。

## 注

- (1) 『マンデヴィルの旅』福井秀加・和田章監訳（英宝社、1997）以下、『マンデヴィルの旅』からの引用および参照はこの版に拠り、本文あるいは注に頁数を示す。中英語あるいは古フランス語による原典は複数の版が現存するが、*Mandeville's Travels*, ed. by M.C. Seymour (Oxford: Clarendon, 1967)に拠る。
- (2) ジャイルズ・ミルトン『コロンブスをペテンにかけた男—騎士ジョン・マンデヴィルの謎』岸本完司訳（中央公論新社、2000）。
- (3) D. R. Howard, D.R, *Writers and Pilgrims* (Berkeley, CA: Univ. of California Press, 1980), p.24.
- (4) Theoderich, *Guide to the Holy Land*, trans. by A. Stewart, with new introd. by R.G. Musto, 2nd edn (New York: Italica Press, 1986).
- (5) Scott D. Westrem, *The Hereford Map : A Transcription and Translation of the Legends with Commentary* (Turnhout : Brepols, 2001).
- (6) ジャン・ドリユモール『楽園の歴史 第1巻 地上の楽園』西澤・小野訳（新評論、2000）、89頁。
- (7) Cf. *Utopia: The Search for the Ideal Society in the Western World*, ed. by Roland Schaer, Gregory Claeys, and Lyman Tower Sargent (New York, NY: Oxford, 2000), p.48.
- (8) 『全訳マルコ・ポーロ東方見聞録——『驚異の書』 fr.2810写本』月村辰雄、久保田勝一訳（岩波書店、2002）、9頁。
- (9) Jonathan Haynes, *The Humanist as Traveler: George Sandys's Relation to a Journey begun An. Dom. 1610* (Cranbury NJ: Associated UP, 1986), pp.99-100.
- (10) Thomas Coryat, *Coryat's Crudities, Hastily gobled up in Five Moneths travells in France, Savoy, Italy, Rhetia Commonly Called the Grisons Country, Helvetia alias Switzerland, Some Parts of High Germany and the Netherlands; Newly*

*Digested in the Hungry Aire of Odcombe in the County of Somerset, and Now Dispersed to the Nourishment of the Travelling Members of the Kingdome*, 2 vols (Glasgow: James MacLehose, 1905).

- (11) Fynes Moryson, *An Itinerary Containing His Ten Yeeres Travell through the Twelve Dominions of Germany, Bohmerland, Sweitzerland, Netherland, Denmarke, Poland, Italy, Turkey, France, England, Scotland & Ireland*, 4 vols (Glasgow: James MacLehose, 1907-08).